

◆最優秀賞 1句

御仏も花も千年迅からむ 桜井教人

愛媛県

俳句における「花」とは桜を指します。御仏も花も千年を変わることなく、そこにあり、そこに咲き、毎年毎年、春を迎えます。千年は、私たちにとっては永遠に近い時間ですが、御仏や花にとっては、ほんの一瞬かもしれません。「迅」の一字が時の一瞬と永遠を現しているかのような深い作品です。

◆優秀賞 5句

仏像は暗きを欲し春を待つ けーい ○

兵庫県

仏像は、暗さを求めてそこに佇んでいるようだという一句。静かな御堂の光景を描いているだけなのですが、季語「春を待つ」によって、やがて差し入る春の光のさまがありありと思われれます。その様子はまるで世を照らす御仏の光のようでもあります。

みかえりや春満月を手渡さむ 富山の露玉

富山県

みかえり阿弥陀像を「や」で強く詠嘆し、その阿弥陀さまがまるで、春満月を手渡すように振り向いてくださるのだよと語りかける一句。「手渡す」の一語は、春満月のみならず、様々のものを手渡してくださる阿弥陀さまの心を示唆するかのようです。

歩くたびどこにも佛ゐて冷た 古田秀

静岡県

境内を本堂を、ゆつくりと歩んでいるのです。「どこにも佛ゐて」とは、いたる所に仏像が在るという意味だけでなく、心と体で感じる御仏との出合いかもしれません。最後の「冷た」という季語は正直な呟きでありつつ、救いを求める言葉とも読めます。

鳥の瞳（め）を金の流るる紅葉かな 穂積天玲

愛媛県

鳥の瞳のアップから始まる一句のなんと鮮やかなことでしょうか。この鳥は生きた鳥なのか、襖絵の鳥なのか。「目」「眼」とせず「瞳」としたことでは装飾的イメージを強くします。瞳に流れる金と紅葉の赤が呼応して、絢爛たる秋が描かれた作品。

八台のストーブ仕舞ふ蓮座裏 山名 凌霄

京都府

毎年「ストーブ」を仕舞う場所は「蓮座」の裏と決まっていますね。「八台」という数詞によつて、本堂の大きさも想像できます。毎日毎夜お世話になったストーブともしばらくお別れという冬の終わり。本堂にあるさりげない日常も俳句です。

◆特別賞 3句

螺髪よりかすかな春の匂いたり 海瀬安紀子

静岡県

お参りした仏様の螺髪にふと眼をやると、そこからまるで春が匂い立つように感じられたというのです。毎年、仏様と共に春の訪れを喜ぶ。「かすかな」という措辞に静かな喜びがあります。

千年の井戸に七草洗ひけり寺津豪佐 島根

県

千年の時を洶れることのない井戸。その清らかな水に一月七日の七草を洗います。変わらぬ水の恵みと七草の滋味を、今年も心して頂く。「洗ひけり」の言い切りにその思いがこもります。

灯明を継ぐ永観の夜学哉 豊島月舟齋

東京都

毎夜、灯明のもとに集つての学問でしょうか、読経の様子でしょうか。明かりが継がれて行くように、学僧の学びも営々と続いていきます。秋の季語「夜学」の一つの姿がここにあります。

◆佳作 100句

1

永観堂冬青空のきつぱりと	亜桜みかり	愛媛県
五色幕から薫風下る臥龍廊	あまぐり	佐賀県
照紅葉漆掠れる阿弥陀堂	あみま	愛媛県
十月の廁が封鎖されてゐる	蟻馬次朗	愛知県
背筋伸ぶしじまの堂に大きくさめ	石垣葉星	神奈川県
那由他不可思議ほとけふりむく紅葉かな	石浜英	大阪府
闇深し紅葉の声を聞く心地	石塚彩楓	埼玉県
照紅葉渡れぬ石の橋清し	斎乃雪	三重県
冴え冴えと灰平らなり大香炉	伊藤京子	愛知県
十念を老いとな言ひそ堂は月	石井一草	千葉県

2

此の寺の物の芽千に千の釈迦	天空	福井県
寒月や龍吐く水の音の澄む	うしうし	東京都
足裏も水琴窟の音も涼し	大槻税悦	兵庫県
上人めくにも程がある冬の蝶	小木さん	愛知県
吝嗇の家系紅葉の寺詣る	小野睦	愛媛県
冬紅葉散るべき風を選びけり	小見伸雄	滋賀県
寒星の水琴窟へ零るるよ	檜の木	大分県
紅葉降る降る千本の箒かな	花紋	愛媛県
階に龍の微睡む春日かな	川崎日知	福岡県
たましひの夜明けと思ふ初紅葉	川野忠夫	群馬県

3

草木零落す猫の足音聞く	河原敏男	群馬県
人の道外れ紅葉に吞まれたり	河本かおり	大阪府
龍吐水つららとなりぬ永観堂	喜多輝女	愛媛県
氷柱吐く手水の龍の目の光る	小笹いのり	山口県
光明や紅葉差し出される如く	北藤詩旦	北海道
まれびとに譲る回廊色葉散る	北村崇雄	兵庫県
春遅しとて振り返る阿弥陀像	きなこもち	福岡県
流星の水琴窟へ落ちる音	ぐ	神奈川県
冬隣る三鈷の松の葉をるる	ぐでたまご	大阪府
紅葉燃ゆ底よりぬつと二重塔	久保田聡	神奈川県

4

大屋根に龍出で遊ぶ冬の寺	久留里のこ	広島県
--------------	-------	-----

紅葉且つ散る渡り廊下の軋む	佳山	茨城県
見返れば鳶の紅葉もありにけり	好日郎	神奈川県
結び目は永観堂の冬の虹	河野しんじゅ	東京都
あたらしき空に出会へり紅葉晴	コッキー+1	神奈川県
石塔に当たりて落つる木の実かな	木幡忠文	東京都
白粥を煮てゐる朝や悲田梅	斉藤立夏	愛知県
永観堂ことにましろに冬ざるる	迫久鯨	東京都
ほくほくとかぶら蒸す間の禅林寺	さち	東京都
5		
無常たることの明るき紅葉かな	佐藤香珠	滋賀県
散る紅葉鬼と仏が同じ顔	三郎	千葉県
門前の蟬の亡骸拾い入る	自灯	京都府
三千の朱を弾いて秋の水	渋谷晶	大阪府
紅葉はや風捉へしか臥龍廊	島美代子	徳島県
墨染のあまたなる背の夏行かな	清水利章	北海道
しづかなる僧や初雪の杜青し	じやすみん	新潟県
伽羅露を煮返す厨永観堂	真	奈良県
総門をくぐりさてきて弁当始	鈴木麗門	千葉県
二人より三人（みたり）は寂し紅葉狩り	清濁子	東京都
6		
秋晴れや今日三度目の永観堂	瀬戸ピリカ	神奈川県
振り返る阿弥陀の先の桜かな	大本山掃除寺	神奈川県
律の風眩しみかえり阿弥陀かな	打楽器	愛媛県
沙羅双樹あたりの所業猫の恋	高橋寅次	東京都
臥龍廊進みて秋に入りにつけり	竹澤 聡	神奈川県
小春日や見返り弥陀は左向き	武井日出子	愛媛県
秋高し寺号碑高し永観堂	蓼蟲	愛媛県
禅林寺ひよいと立ち寄る龍田姫	田村利平	群馬県
み仏のみ名称ふれば雪虫	外山まこと	東京都
大いなる冬の日だまり禅林寺	中村ケンジ	滋賀県
7		
朔風は先を急ぎぬ臥龍廊	中山月波	大阪府
濃紅葉を厄除けのごと身に照らし	夏湖乃	岐阜県
光ほろほろ岩垣紅葉てふ愛	七瀬ゆきこ	三重県
踵骨躑躅々しき僧や冬の朝	西村小市	埼玉県
梵鐘の音の尻尾や大晦日	28あずさち	三重県
かげろふや奉納刀の紐垂るる	登りびと	兵庫県
禅林寺けふのあらたな紅葉かな	はぐれ雲	東京都
底冷えの臥龍廊へと歩み入り	畑人	静岡県
紅葉散る石のほひの龍の水	早田駒斗	東京都

やや左傾(かし)ぐ蝸牛や永観堂

平本魚水

広島県

8

顧みる弥陀の半眼冴ゆるかな

樋口 俊子

兵庫県

春光や螺髪の白き阿弥陀さま

ひでやん

愛媛県

禅林寺母の歩幅でゆく小春

藤田ゆきまち

三重県

春月を刻み永観堂ましろ

古瀬まさあき

長野県

きざはしに紅葉の嵩や僧の杓

水野大雅

愛知県

御朱印の墨の香りよ年惜しむ

みつぎ

茨城県

手水舎の龍の髯より凍りけり

都乃あざみ

京都府

桜まじ明るき龍の道をゆく

みやこわすれ

愛知県

称名は御堂に充てり解夏の朝

むげつ空

千葉県

しづり雪弾けて空へ多宝塔

もふもふ

千葉県

9

まなこ閉ぢ詩囊に紅葉を溢れしむ

百田登起枝

神奈川県

もみじ散る散る銭湯寄って帰ろ

森田 欣也

愛媛県

迷宮へ木肌冷たき臥龍廊

もりたきみ

奈良県

龍天に登る月夜の禅林寺

森山博士

東京都

念仏は螺旋のごとく春の月

夜行

京都府

氷柱吐く龍頭や寺の朝まだき

八幡風花

福岡県

夏蝶が吾を従へて臥龍廊

ルーキー

山梨県

蛸のとわずがたりや永観堂

渡辺笑子

東京都

踏まれたるマスクや明日は永観忌

はっち

三重県

青もみぢつまらぬことを悩みをり

堀隼人

奈良県

10

静けさは鏡なりけり水の秋

廸方温峇

神奈川県

青楓の湖の底なる禅林寺

陽光

愛知県

総門から走るの禁止ことり来る

白プロキオン

東京都

夕焼のしっぽつかんだ永観堂

杉柳才

愛知県

紅葉かつ散る自分史は道半ば

井上きうい

愛媛県

しづり雪音の遅れて多宝塔

野地垂木

北海道

多宝塔登れば京を青嵐

巴里乃嬢

神奈川県

永観忌土の鼓動の確かなり

田中公子

京都府

爽やかや剃り跡青し若き僧

千春

兵庫県

回廊の人波途切れ青楓

のんきミッキー

大阪府